

論文の内容の要旨

氏名： 山形 泰之

博士の専攻分野の名称： 博士（総合社会文化）

論文題名： カント哲学における宗教思想の展開

本論は、カント(Immanuel Kant)の『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』（以下、三批判書）ならびに『たんなる理性の限界内の宗教』（以下『宗教論』）『オプス・ポストゥムム』第7束、第1束（以下『遺稿』）に於ける議論を検討する中で、批判期から晩年に至るまでのカントの宗教思想を抽出することを目的としている。カントの宗教思想は「理性宗教」あるいは「理性信仰」の名の下にその議論が出尽くしている感もあるが、それは主として三批判書に於けるカントの思想的到達点を論じるものであり、晩年のカントの宗教思想に留意したものではない。本論は批判期のカントの考えを論じると同時に、それだけでは語り尽くせない晩年期すなわち『宗教論』以降の思想をも議論の対象に入れる中で、カント宗教思想の展開を検討し、その独自性を考察するものである。

1. 構成

本論は、第1章から第7章そして結論より構成され、その内容は大きく分けて以下の三点から成るものである。第1章から第4章まではいわゆる「理性宗教」に関する議論である。第5章は「理性宗教」からの転換点としての『宗教論』を検討し、第6章、第7章では、『遺稿』に於けるカント宗教思想の検証を行っている。一連の議論から論証されうるカントの思想の展開を示し、結論としてカント晩年の独自の宗教思想を提示している。

2. 各章の概要

(第1章)

『純粹理性批判』に於いて消極的に導出された自由の議論から、それを引き継ぐ『実践理性批判』による積極的な自由への展開を確認し、カントによる両批判の相互関係に基づく神へのアプローチを検証した。私たち人間をア priori に道徳的存在とする議論は、単に「理性の事実」のみに依拠する故に、他なる視点からの論証の必要性が惹起されるものの、カントの方法は、中世から近代にかけて行われた思弁による独断的な神の存在証明を批判的に捉え、私たち人間がどのようにして神に接近できるのかという問題の新たな道筋を構築したと考えられる。

(第2章)

『純粹理性批判』と『実践理性批判』の関係のみで、神へのアプローチが図れるとするならば、宗教思想としての『判断力批判』の位置づけが見えなくなるだろう。本章では、『判断力批判』もカント宗教思想の一端を成すことを示しながら、三批判書の連関を検証するものである。とりわけ私たち人間が如何にして道徳的存在であり得るのかという問題に対して、その答えの一つをカントによる美感的判断力の議論に求めたのであるが、その議論を通じて、単に「理性の事実」に依拠した道徳的存在としての人間の論証ではなく、美を媒介にすることによって人間と叡知的なものとの関わりを見せていくのである。

(第3章)

第2章に於ける議論を踏まえながら、『判断力批判』のもう一つの主題である目的論的判断力の考察を行うものである。美感的判断力の議論は、美という人間の快の感情に関わる性質上、内的・主観的なものと考えられる。故にその議論が客観性を持つか否かという点で弱点が見られた訳である。目的論的判断力の議論は、両判断力の原理となる合目的性を、私たち人間の外界に当てはめたときにどのような諸相を見せるのかが課題となる。そこから現れてくる有機体的諸相は、外界における人間を含めた様々な動植物の連関、さらには私たち人間の本来の目的を探る議論を惹起し、最終的に私たち人間の目的が道徳的存在であることに結びつくのである。

(第4章)

『判断力批判』の議論を検証していく中で、私たち人間が道徳的存在であることが補強されていく訳であるが、『判断力批判』に於いても道徳的人間の存在から、最高善の議論を通じて神へと至るという論理構造は『実践理性批判』と同様に維持されている。仮に『判断力批判』と『実践理性批判』の最高善に纏わる結論が同じであるとするならば、三批判書が相互に不足する点を補足しながら、神へのアプローチを図っていると考える本論の立ち位置が弱まるものと考えられる。そこで本章では、『実践理性批判』と『判断力批判』に於ける最高善思想の異同を「方法論」から探り、どの部分で『判断力批判』の議論が、『実践理性批判』の内実を超え出ているのかを検証していった。結論として見えてくることは、『実践理性批判』の最高善は個々人を前提としたものであり、『判断力批判』で論じられている最高善は類としての人間を対象としていることである。類として道徳的存在であるのかという議論は、当然のことながら私たち人間が道徳を通じて神へと接近し得ることをより確かなものとして見せていくのである。

さてここまではカントの「理性宗教」と称される枠組みでの議論である。「理性宗教」とは私たち人間の自律を前提として、その人間の最終的な目標（最高善）を達成する為に神が導出されるという考えである。ここで留意しなければならないことは、人間の目標の実現のために神は補助的に現れ、人間と神の人格的な関係はないということではないだろうか。あくまでも「理性宗教」は人間中心主義の思想なのである。

本論は、第1章から第4章までに見た「理性宗教」の思想的地平を踏まえつつも、それを超える宗教思想が、カントの思想の中に含まれていないのかどうかを見るものである。以下第5章からは、「理性宗教」からの転換点と、その宗教思想の発展を考察している。

(第5章)

本章では『宗教論』とりわけその第一編、第二編を俎上に載せ、いわゆる根元悪思想とその克服を検証するものである。『宗教論』に於ける根元悪思想の導入は、自律的存在とされる人間の立ち位置を揺るがせにするものである。そこでは、私たち人間の根本的な弱さが論じられ、神との関わりなくしては、人間が成長・発展していくことができないことが記されている。

象徴的に表れるイエス像は、カントの宗教思想がキリスト教思想との融合を図るかに見せつつも、留意しなければならないことは、カントが論じる神やイエスとの関わりは、単に他律を示すものではなく、私たち人間に内在する本来的な善いもの（原像）を如何に引き出していくのかに焦点が当てられているということである。自律した人間像は弱まるものの、否定されるものではないという独特なカントの立ち位置が見出されるものである。

(第6章)

先に見た『宗教論』の議論は一部のカント研究者や宗教哲学者から、カントの自律的な思想体系からの異端として見られることがある。確かに、三批判書と『宗教論』のみを比較したのでは、そのような解釈も為されうるが、『宗教論』以降のいわゆる晩年期のカントの宗教思想を考察してみるならば、「理性宗教」の一言では論じきれないカント宗教思想の発展があるのではないだろうか。本章ではカント最晩年の著作である『遺稿』を着目し、議論を展開したものである。

宗教思想的視点から『遺稿』を扱う上で、重要な論点として定言命法の議論が挙げられる。三批判書では、定言命法は、『実践理性批判』に於いて主に論じられているが、そこでの議論と『遺稿』での議論が質を同じくするものなのか否かということに留意しなければならない。『実践理性批判』での定言命法の議論は、最高善導出の関わりの中で論じられるものであり、その神の出現は補助的なものに過ぎなかった。一方『遺稿』では、義務を課す神と、課される神の関係が論じられ、その議論は完全たる神と不完全たる人間という内容に及ぶのである。直接的な神の顕現は、三批判書における補助的な神の出現を超え、私たち人間と神の直接的な関わりを想起させるものなのである。

(第7章)

第6章に於いて論じられた『遺稿』の神は、私たち人間と直接的に関係を持つ神である。『遺稿』ではその神の姿を「外なる神、内なる神、周りの神[ein Gott in mir um mich und über mir]」と論じている。「周りの神」とは、外なる神と内なる神を包摂する関係の神ということができるだろう。私たち人間の本

来的に善いものを、神との関わりの中で見出していく、そこには、単に神の他律ではなく、なおかつ完全なる人間の自律でもない、人間と神の自律・他律の関係が見出されていくのである。

『宗教論』第三編では、『遺稿』で論じられている理念的な神の姿が具体的な姿を以って論じられている。私たち人間は、Mitwirkung（共働）と称される神との関係に於いて自らの発展、ならびに社会の発展を希望することができると思われる。

（結論）

カント晩年の宗教思想は、Mitwirkung（共働）の神を議論の中心に置きながら、単に「理性宗教」の枠組みに収斂されることのない、また既成の宗教思想とは一線を画した、私たち人間と神の関係を提示しているものとする。